



プログラム・予稿集



2014 in UTSUNOMIYA

■大会
Conference

日本感情心理学会

第22回年次学術大会

■会場
Venue

宇都宮大学 大学会館

■主題
Thema

社会的共生と感情

■共催
Cohosts

宇都宮大学大学院 国際学研究科
教育学研究科

5月31日

先勝

6月1日

友引

ごあいさつ

日本感情心理学会第22回年次学術大会へようこそおいでくださいました。宇都宮を訪れるのは初めてという方も少なくないかと思いますが、かつてこの宇都宮大学で年次大会をお引き受けしたことがあります。ちょうど記念すべき第10回大会でしたので、緊張しつつ準備を進めたこと、また企画委員(当時)をはじめ、多くみなさまのご助力で盛会のうちに実施できたことを思い出します。その際には、まだ設立10年あまりの若い本学会を5月の新緑に例えてご挨拶をいたしました。あれから12年の歳月が過ぎ、いつまでも若さを主張しているだけでは済まされない時期になってきていると感じています。

さて、本大会では、これまでの大会と同様に、会員みなさまの研究成果発表のための、情報交換のための、さらにまた、新たな視点からの感情研究のアイデアを得るための場となるよう、準備委員会が一丸となり準備を進めてまいりました。さらに、感情研究の発展の一つの方向として、学際的、異分野融合的研究の可能性を検討することを目指し、「社会的共生と感情」をメインテーマに掲げました。心理学の様々な領域にとどまらず、心理学以外の学問分野からの話題提供、討論を交えて、感情研究のさらなる発展の可能性、必要性について学際的に議論する機会にさせていただきたいと思います。

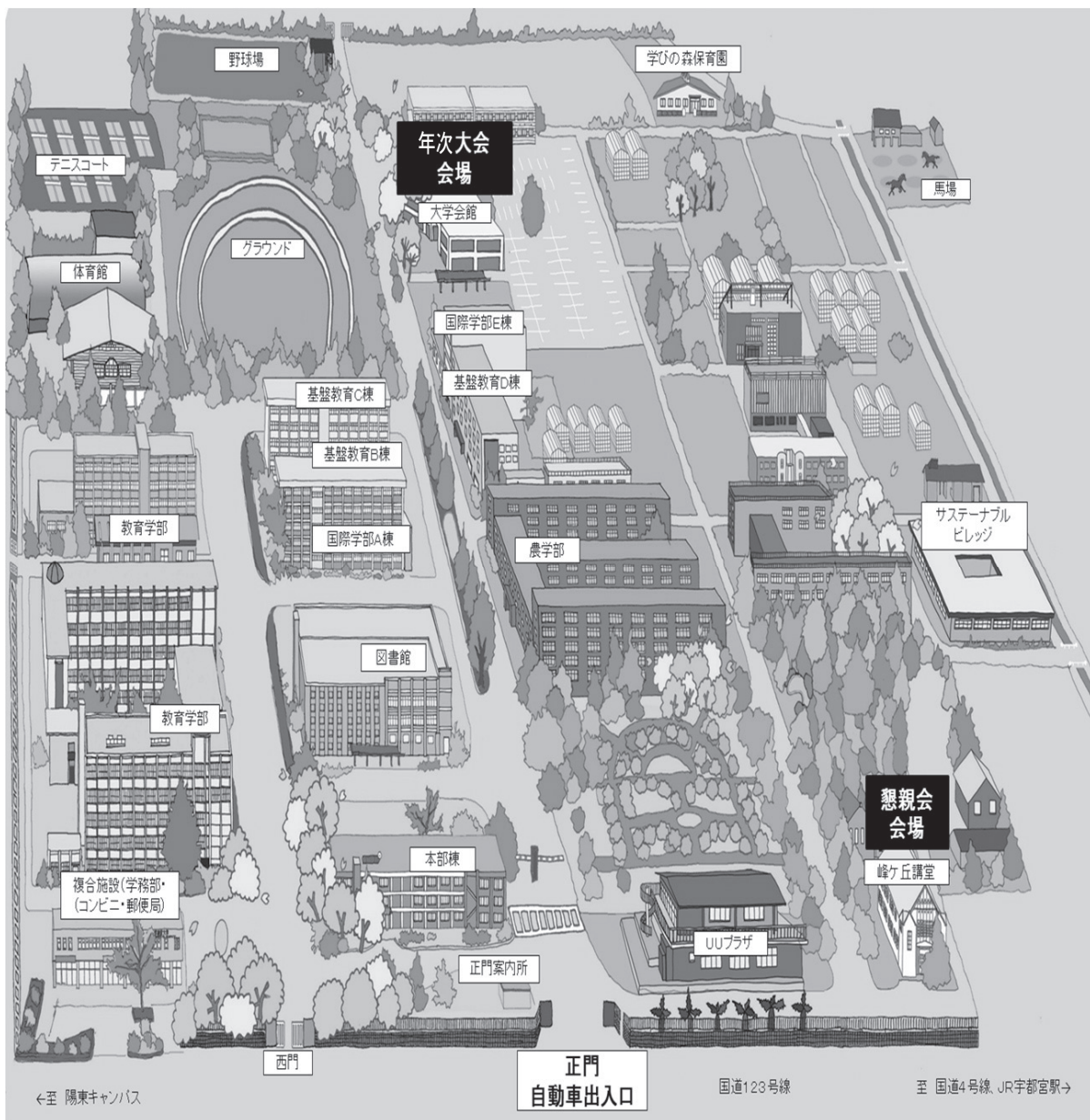
また、本大会では、本学会年次大会としては初めての試みとして、研究のフロンティアで活躍する2人の若い研究者に連続講演をお願いしました。関連して、大会前日には、サテライト形式で「若手研究者」の研究集会を開催していただくことにいたしました。これらの企画は、学会として「若手研究者」を支援するための試みでもあります。このような試みを重ねることで、新緑の若木であった本学会が力強く緑の葉を開き、より太い幹と広く伸びた枝を持つ大きな木へと成長していくことを願っています。

なお、研究発表や講演、シンポジウムだけではなく、懇親会におきましても、日頃話す機会の少ない他分野、他領域の研究者同士で交流し、親交を深めていただきたいと思います。宇都宮大学の歴史的建造物の一つである峰ヶ丘講堂を貸切りまして、みなさまをお待ちしています。学術交流とともに、是非ともお楽しみください。

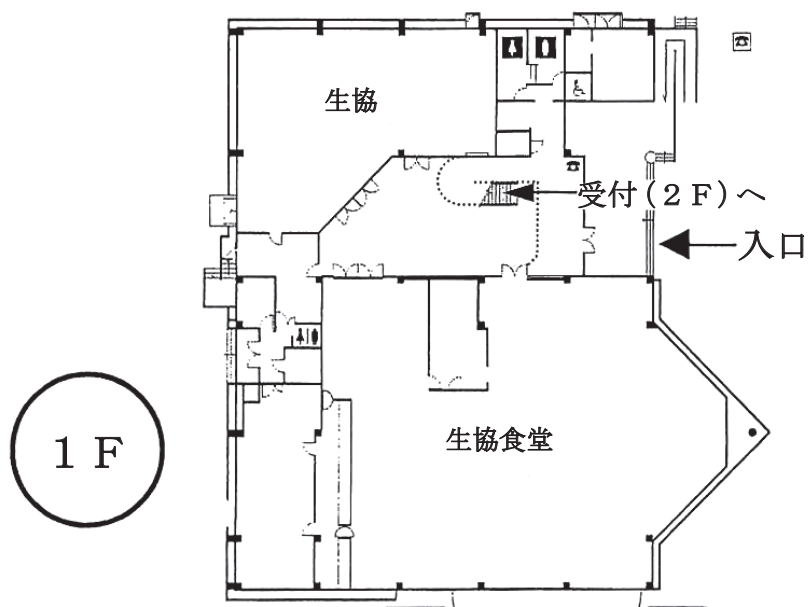
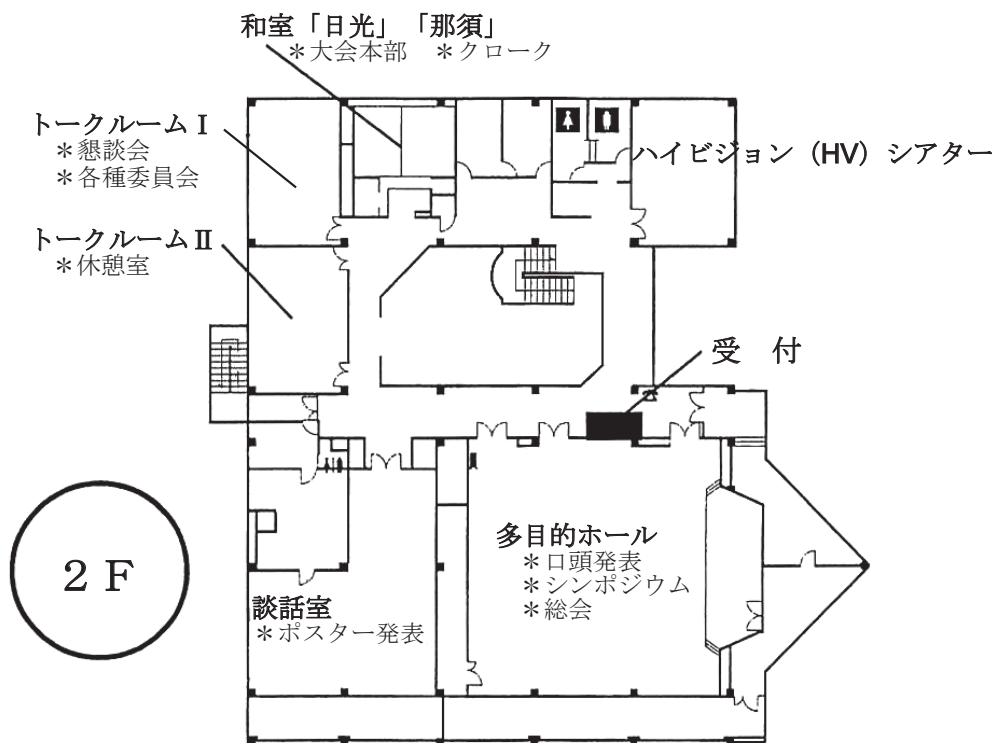
2014年5月

日本感情心理学会第22回年次学術大会準備委員会
委員長 中村 真

大会会場周辺地図(宇都宮大学峰キャンパス)

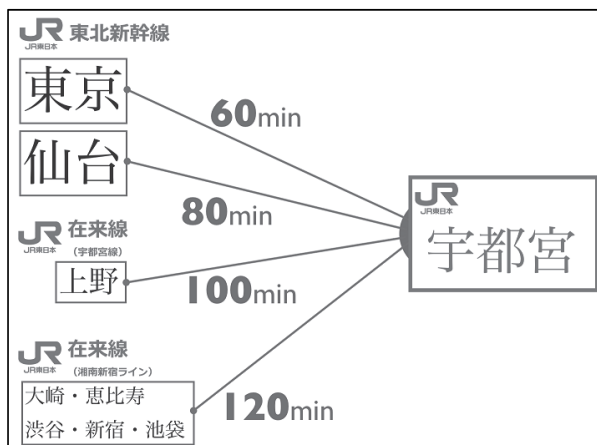


大会会場案内



会場までのアクセス

1. 栃木県へのアクセス



- 注1) 東北新幹線をご利用される場合、必ず宇都宮駅に停車するものかどうかご確認ください。たとえば「はやて」は宇都宮を素通りしますので乗車しないでください。
- 注2) 東武宇都宮駅からバス・タクシーでの来場も可能ですが、JR宇都宮駅からは、同じ駅名を冠しているとは思えないほど離れておりますので、くれぐれもご注意ください。

2. 宇都宮大学峰キャンパスへのアクセス



東野 (とうや) バス (乗車時間: 約 15 分, 東武宇都宮駅バスの場合 約 25 分)
乗車するバス: 真岡 (もおか), 益子 (ましこ), 平松町循環, 東峰町循環,

ベルモールなど

バス停：JR 宇都宮駅西口バス乗り場 14 番，東武宇都宮駅バス乗り場

下車するバス停：宇大前（うだいまえ）

運賃：200 円（後払い）

JR バス（乗車時間：約 15 分）

乗車するバス：清原台団地（きよはらだいだんち），祖母井（うばがい），
茂木（もてぎ）など

バス停：JR 宇都宮駅西口 バス乗り場 3 番

下車するバス停：宇大前（うだいまえ）

運賃：200 円（後払い）

関東バス（乗車時間：約 10 分）

乗車するバス：宇都宮駅東循環バス（左回り）

バス停：JR 宇都宮駅東口バス乗り場 3 番

下車するバス停：宇大前（うだいまえ）

運賃：150 円（後払い）

タクシー

JR 宇都宮駅東口乗り場（乗車時間：約 5 分）

運賃：約 1,100 円（運転手によって異なります）

大会スケジュール

	大会 0 日目 5月30日 (金)	大会 1 日目 5月31日 (土)	大会 2 日目 6月1日 (日)
8:30			受付開始
9:00		受付開始	
9:30		開会	ポスター発表②
10:00		ポスター発表①	
10:30			
11:00		口頭発表①	口頭発表②
11:30			
12:00	オ ブ シ ョ ナ ル ツ ア ー	休憩	委員会
12:30		懇談会	委員会
13:00			
13:30		若手連続講演 「集団間紛争と怒り」	シンポジウム 2 「共感と紛争」
14:00			
14:30		休憩	
15:00			休憩
15:30	若手感情研究者 ワークショップ 「感情研究の現在を読む」 「嫌悪の基礎と臨床研究会」	シンポジウム 1 「いじめと文化」	口頭発表③
16:00			
16:30			総会
17:00			閉会
17:30			
18:00	常任・理事会 (17:45~18:45)	懇親会 (峰ヶ丘講堂)	
18:30			
19:00			
19:30			
20:00			

大会行事等

1. 一般研究発表

大会両日にわたり、口頭発表とポスター発表が行われます。会場は口頭発表が多目的ホール、ポスター発表が談話室です。

2. 若手研究者連続講演

大会2日目に、研究のフロンティアで活躍されている若い世代の研究者(Young Leading Researchers)にYLR連続講演として、「集団間紛争と怒り」に関するご講演をいただきます。会場は多目的ホールです。

3. シンポジウム

2つのシンポジウムが企画されています。シンポジウム1「いじめと文化」は大会1日目、シンポジウム2「共感と紛争」は大会2日目に開催されます。いずれも会場は多目的ホールです。

4. 大会関連企画

若手研究者の研究活動支援の一環として、大会前日 15:30～17:30 に、「嫌悪の基礎と臨床研究会」と、「感情研究の現在を読む」と題した読書会が開催されます。会場はトークルーム I, II です。

5. 総会

2014年度総会は大会2日目 16:30～、多目的ホールにて開催されます。

6. 懇談会

大会1日目 12:00～13:00 に、機関誌の電子化に関する意見聴取、質疑応答のための懇談会が行われます。会場はトークルーム I です。

7. 各種委員会

(1) 常任理事会・理事会が、大会前日 5月30日(金)17:45～18:45 に多目的ホールで開催されます。

(2) 編集委員会が、6月1日(日)12:00～13:00 にトークルーム I で開催されます。

8. 懇親会

大学内の峰ヶ丘講堂にて、1日目 17:30～19:30 に開催いたします。会場の峰ヶ丘講堂は、大正13年に建てられた木造づくりです。大正ロマン溢れる雰囲気、美味しい料理とともに楽しみください。

9. 展示

大学会館内 2F に展示スペースを設けます。ぜひお立ち寄りください。

大会参加者へのご案内

1. 大会受付

場 所 宇都宮大学大学会館（峰キャンパス）

時 間 5月31日（土）9:00～17:00

6月 1日（日）8:30～16:30

2. 大会参加費

（1）事前予約参加者の方

受付にお立ち寄りください。受付でお名前をお聞きし、予約参加について確認いたします。その後、参加証をお渡しいたします。

予約参加の方

大会参加費

正会員（一般） 6,000円

正会員（院生） 5,000円

学生会員（非会員を含む） 1,000円

非会員（一般） 7,000円

懇親会費

一般 6,000円

学生（大学院生を含む） 4,000円

（2）当日参加（非会員を含む）の方

大会参加費（当日会費）

正会員（一般） 7,000円

正会員（院生） 6,000円

学生会員（非会員を含む） 1,500円

非会員（一般） 8,000円

懇親会費（当日会費）

一般 7,000円

学生（大学院生を含む） 5,000円

3. クローク

大会期間中、大学会館内2Fに設けております。貴重品は各自でお持ちいただきますようお願いいたします。懇親会の間は、懇親会会場にお荷物をお持ちください。

4. 昼食

大会1日目は、大学会館1Fの生協食堂が営業しております。大会2日目につきましては、生協食堂は閉店のため、ご利用いただくことができません。また、両日とも、お弁当を1000円にて販売いたします。ご予約いただいた方が優先となり、当日販売は僅少となります。

研究発表者へのご案内

1. 口頭発表の方へ

口頭発表は、Windows と Macintosh の PC を各 1 台用意しています。発表当日、ご発表前に USB メモリ等にデータを入れてデータをご持参ください。なお、ご用意いただくファイル名は、以下の通りでお願いいたします。

「JSRE2014_OS01～17」 OS 以下の番号に各自に割り振られた番号を記入してください。使用可能なソフトは以下の通りです。

- (1) PowerPoint (Microsoft Office 2010 : Windows7)
- (2) Keynote (iWork 09 : Mac OS10.8)
- (3) Prezi (ネットに繋がった Win もしくは Mac の任意のブラウザ)

口頭発表 1 題の持ち時間は 15 分です。1 鈴 : 10 分, 2 鈴 : 12 分 (発表終了の目安), 3 鈴 : 15 分 (質疑応答を含む発表終了) となります。

2. ポスター発表の方へ

掲示用ボードのサイズはヨコ 110cm×タテ 160cm となります。

本大会では、B 1 サイズ (ヨコ 103cm×タテ 72cm : 1～2 枚) によるポスター発表を推奨いたします。ただし、B 1 サイズ印刷が難しい場合は、掲示ボードに収まるようでしたら他のサイズによるポスターも妨げません。ポスター貼付用の磁石は受付で用意しています。

在席責任時間は、当該セッション中の 60 分間となります。セッション開始後 30 分前後の時間帯に会場係が出欠をとりに伺いますので、ご協力ください。

ポスター発表の会場は、正規の掲示時間に拘らず、大会 1 日目の 9 時から 2 日目の 16 時 30 分まで使用できます。1 日目のみの参加をご予定の方も、事務局による撤去をご了承いただければそのままご掲示いただいても結構です。なお、6 月 1 日の 16 時 30 分を過ぎても掲示されているポスターは、事務局にて撤去・処分いたしますので、あらかじめご了承ください。

3. 共通事項

登録完了後、発表論文をご作成いただき、期日までにご提出いただくことが発表が公式に記録される要件となります。

提出期限等の詳細は以下の通りです。発表前にご提出いただいても構いませんが、締切り厳守でお願い申し上げます。

様式 大会サイト (<http://jsre.wdc-jp.com/conf/2014/>) からダウンロードしてご使用ください。

期日 6 月 15 日 (日)

宛先 日本感情心理学会第 22 回年次学術大会準備委員会 (jsre@utsunomiya2014.jp)

大会関連企画

大会前日、5月30日（金）15:30～、若手研究者による研究集会（YER ワークショップ）が開催されます。参加費は無料です。

企画1「感情研究の現在を読む」 トークルームⅠ

企画者 藤原 健（大阪経済大学人間科学部） 木村健太（独立行政法人産業技術総合研究所） 藤村友美（独立行政法人産業技術総合研究所）

最新の Emotion Review では“William James and His legacy”といった特集が生まれ、その前には“Psychological Constructivism”なる特集が組まれた。また、2012年には“On Defining Emotion”なる企画も組まれていた。こういった動向をみると、海外においても「感情とは何か」といった議論が再燃しているものと見受けられる。例えば“Psychological Constructivism”の特集を紐解けば、「感情は生物学的な反応・機序だけでも定義できないが、社会的構築論の立場だけでも不完全である」といったようなことを指摘し、感情が何によって説明され、何を説明するものなのかを再考するような議論がみてとれる。

企画者たちは、感情研究を志す若手にこそ、こうした議論が必要なのではないかと考えている。そこで、「感情研究の現在を読む」と題した読書会を企画したい。題材については、感情研究の動向を知るうえで有力なツールになると考えられることから、ここ1、2年内の Emotion Review を用いることとする。

当日の発表は、Psychological Constructivism, Emotion Review, 5(4) を藤原が、William James and His Legacy, Emotion Review, 6(1) を木村が、Facial Expression, Emotion Review, 5(1) を藤村が担当する。特集号の中から1報あるいは特集号全体の概要を発表（約15分）し、その後議論の時間を設ける（約25分）。

また、広く参加者を募りたいと考えているため、当日は非発表者も奮ってご参加いただきたい。企画者一同、参加者の皆さまと「素敵な時間」が過ごせたらと考えている。

企画2「嫌悪の基礎と臨床研究会」 トークルームⅡ

企画者 岩佐和典（就実大学教育学部）

嫌悪は基本感情の1つに数えられる固有の感情であり、疾病の回避を主な機能とすることが知られている。1990年代以降、海外で生じた嫌悪研究の興隆とは対照的に、本邦においてはようやく萌芽期を迎えたばかりである。嫌悪研究には未だ数多くの基礎的・臨床的な研究課題が残されており、感情研究者だけでなく臨床心理学者にとっても魅力ある研究領域だと言えるだろう。そこで本研究会では、これまでに本邦で行われた嫌悪の基礎研究・臨床研究について議論し、今後行われるべき研究の方向性を探っていくこととする。

15:30 - インTRODakション：岩佐和典（就実大学）

15:45 - 話題提供 1：岩佐和典（就実大学）

「嫌悪感受性の概念と測定」

16:15 - 話題提供 2：田中恒彦（滋賀医科大学）

「精神疾患において嫌悪感が問題となる時～嫌悪感回避とその治療～」

16:45 - 話題提供 3：佐々木恭志郎（九州大学 / 日本学術振興会）

「(仮) 視覚的嫌悪感の規定因 or 嫌悪感と創造性」

17:15 - 全体ディスカッション

プログラム

注) #印は日本感情心理学会会員以外であることを示す。

若手研究者連続講演

「集団間紛争と怒り」 5月31日(土) 13:00~14:30 多目的ホール

企画・司会 石川隆行(宇都宮大学)・澤田匡人(宇都宮大学)

演者 遠藤寛子(筑波大学)

「怒りの維持と他者への共感—言語化による新たな視点の獲得—」

縄田健悟[#](九州大学)

「“われわれ”としての感情とは何か？

—集団間紛争における情動の役割を中心に—」

シンポジウム

シンポジウム1「いじめと文化」 5月31日(土) 15:00~17:00 多目的ホール

企画・司会 澤田匡人(宇都宮大学)・石川隆行(宇都宮大学)

シンポジスト

池上知子(大阪市立大学)

「平等主義文化における排斥と蔑み」

金網知征[#](甲子園大学)

「いじめを通してみた日英子ども文化比較」

一言英文(関西学院大学)

「いじめと文化的心性との交点」

指定討論者 米山正文[#](宇都宮大学)

シンポジウム2「共感と紛争」 6月1日(日) 13:00~15:00 多目的ホール

企画・司会 中村 真(宇都宮大学)・石川隆行(宇都宮大学)

シンポジスト

長谷川寿一[#](東京大学大学院)

「動物における『紛争(もめ事)』解決と共感性の生物学的起源」

遠藤由美[#](関西大学)

「共感の社会的パースペクティブ」

清水奈名子[#](宇都宮大学)

「武力紛争研究における感情の位置づけ」

指定討論者 大平英樹(名古屋大学大学院)

研究発表（口頭発表）

5月31日（土） 大会1日目 口頭発表① 10:30～12:00 多目的ホール

座長：阿部恒之（東北大学大学院）

- OS01. 顔表情からのネガティブ感情認知における日タイ異文化
堀本美都子（神戸大学国際文化学研究所）
米谷 淳（神戸大学大学教育推進機構）
- OS02. 他人を見下す人は他人の不幸も喜ぶのか？
—仮想的有能感の類型別に見る妬みとシャーデンフロイデの関連—
藤井 勉（Sungshin Women's University）
澤田匡人（宇都宮大学教育学部）
- OS03. 文化的自己観，アレキシサイミア，身体感覚／感情の弁別的明瞭性の関係
金井雅仁（筑波大学大学院人間総合科学研究科）
湯川進太郎（筑波大学人間系）
- OS04. 真偽判断に及ぼす制御焦点の影響
小形佳祐（東北大学大学院文学研究科）
阿部恒之（東北大学大学院文学研究科心理学講座）
- OS05. シニア健康開発に心理学リテラシーを考案する実践への検証
—本人記述データと「感情」研究の交流におけるモデル設定—
糸魚川幸宏（Wisdom Inc）

6月1日（日） 大会2日目 口頭発表② 10:00～12:00 多目的ホール

座長：樋口匡貴（上智大学）

- OS06. 派生的感情および二重抑制と精神的健康の関連性
井ノ川侑果（筑波大学大学院人間総合科学研究科心理専攻）
山口正寛（東京未来大学こども心理学部こども心理学科）
湯川進太郎（筑波大学大学院人間総合科学研究科）
- OS07. 特性尊敬関連感情尺度の作成の試み
武藤世良（東京大学大学院教育学研究科／日本学術振興会）
- OS08. 現場実験によるゴミの不法投棄抑制要因の検討
中俣友子（東北大学大学院文学研究科）
阿部恒之（東北大学大学院文学研究科心理学講座）

- OS09. 羞恥表出者に対する観察者のパーソナリティ評価
—失敗状況および成功状況を用いた検討—
福田哲也（広島大学大学院教育学研究科）
樋口匡貴（上智大学総合人間科学部）
- OS10. (発表取消)
- OS11. サイコパシー傾向者は他者から嫌われることをどう認知しているか？
河野和明（東海学園大学人文学部心理学科）
羽成隆司（椋山女学園大学文化情報学部）
伊藤君男（東海学園大学人文学部心理学科）
- OS12. 特別な呼吸法の事前実施が緊急事態時の行動を改善させる
上田真由子（西日本旅客鉄道株式会社安全研究所）
和田一成（西日本旅客鉄道株式会社安全研究所）
臼井伸之介[#]（大阪大学大学院人間科学研究科）

6月1日（日） 大会2日目 口頭発表③ 15:10～16:30 多目的ホール

座長：河野和明（東海学園大学）

- OS13. 対人間の制御に関する知覚制御理論的考察
金築 優（法政大学現代福祉学部）
金築智美[#]（東京電機大学工学部）
- OS14. 逸脱行動に対する感情評価の検討—災害時の創発規範—
Wiwattanapantuwong Juthatip（東北大学文学研究科心理学講座）
阿部恒之（東北大学大学院文学研究科心理学講座）
- OS15. 身体意識尺度の作成
馬 艶青（東北大学文学研究科心理学講座）
- OS16. 運の知覚の事前操作がギャンブル時の感情と行動に及ぼす影響
高田琢弘（筑波大学大学院人間総合科学研究科／日本学術振興会）
湯川進太郎（筑波大学人間系）
- OS17. 自然に対してなぜ感動するのか？：死の顕現性仮説からの検討
樋口匡貴（上智大学総合人間科学部）
柳川美貴[#]（(株)日立ハイテクソリューションズ）
福田哲也（広島大学大学院教育学研究科）

研究発表（ポスター発表）

5月31日（土） 大会1日目 ポスター発表① 9：30～10：30 談話室

- PS01. メール・コミュニケーションにおける顔文字の交換過程が対人感情に及ぼす影響
木村昌紀（神戸女学院大学）
山本恭子（神戸学院大学）
- PS02. タイ人はラフカディオ・ハーンの「日本人の微笑」をどう解釈するか。
POTHISITHPORN TIPPAYARAT（神戸大学国際文化研究科）
米谷 淳（神戸大学大学教育推進機構）
林 萍萍（神戸大学国際文化研究科）
- PS03. ネガティブ感情間における喚起場面の相違—大学生の持つ感情観について—
佐藤重隆（東洋大学大学院）
戸梶亜紀彦（東洋大学社会学部社会心理学科）
- PS04. 悲しみ評価尺度の作成および6種類の悲しみ喚起場面における評価の検討
白井真理子（同志社大学大学院心理学研究科／日本学術振興会）
鈴木直人（同志社大学心理学部心理学研究室）
- PS05. 悲しみに対する態度尺度作成の試み
杉浦悠子（愛知淑徳大学心理医療科学研究科）
清水 遵（愛知淑徳大学心理学部）
小川一美（愛知淑徳大学心理学部）
- PS06. 認知的感情制御と抑うつ・不安の関連—メタ分析による検討
榊原良太（東京大学大学院教育学研究科）
- PS07. IAPS のカラー／モノクロ呈示時の感情喚起効果
—感情リアルタイム評定による検討—
櫻井優太（愛知淑徳大学心理学部）
清水 遵（愛知淑徳大学心理学部）
- PS08. 持続的な不信感の神経相関
鈴木敦命（名古屋大学大学院環境学研究科）
木山幸子[#]（国立長寿医療研究センター）
國見充展[#]（国立長寿医療研究センター）
大平英樹（名古屋大学大学院環境学研究科）
川口 潤[#]（名古屋大学大学院環境学研究科）
中井敏晴[#]（国立長寿医療研究センター）

- PS09. 対人場面における聞き手の態度が話し手の生理反応に及ぼす影響
 中川紗江 (同志社大学大学院心理学研究科/日本学術振興会)
 鈴木直人 (同志社大学心理学部心理学研究室)
- PS10. 面子が潰されるとどう感じるか—質問紙法による中日比較—
 林 萍萍 (神戸大学国際文化研究科)
 米谷 淳 (神戸大学大学教育推進機構)
- PS11. 教師の受容的態度および学級での三者関係が児童の感情に及ぼす影響
 大久保智生 (香川大学教育学部)
- PS12. アタッチメントと感情的共感性の関連—ポジティブ・ネガティブ感情に着目して—
 今野仁博 (岡山短期大学)
- PS13. マグレガー「Y理論」の基礎に関する覚書—1946年論文を中心に—
 村田晋也 (九州国際大学)
 河野昭三[#] (甲南大学)
- PS14. 改訂嫌悪傾向・感受性尺度日本語版の因子構造, 信頼性, 妥当性
 岩佐和典 (就実大学)
 田中恒彦[#] (滋賀医科大学)
 山田祐樹[#] (九州大学)
- PS15. 社会的価値の志向性が悲しみを伴った感動に及ぼす影響
 —お金ブライミング操作と映像『さよならドラえもん』を用いて—
 加藤樹里 (一橋大学大学院社会学研究科)
 村田光二 (一橋大学大学院社会学研究科)

6月1日(日) 大会2日目 ポスター発表② 9:00~10:00 談話室

- PS16. 幼児の指差し行動にみられる注視と表情認知にともなう情動調整過程
 中田 栄 (帝京大学)
- PS17. 「笑うこと」が気分の改善に及ぼす影響
 平井 花 (学習院大学大学院人文科学研究科心理学専攻)
- PS18. 複数人数での資源分配における罪悪感の影響
 古川善也 (広島大学大学院教育学研究科)
 中島健一郎[#] (広島大学大学院教育学研究科)
 蔵永 瞳 (就実短期大学幼児教育学科)
 森永康子[#] (広島大学大学院教育学研究科)
- PS19. 尊敬の心理学的特徴
 蔵永 瞳 (就実短期大学幼児教育学科)
 樋口匡貴 (上智大学総合人間科学部)

- PS20. 2項目自尊感情尺度の妥当性の検討—評価的側面・受容的側面それぞれに注目して—
箕浦有希久（関西学院大学大学院文学研究科）
成田健一（関西学院大学文学部総合心理科学科）
- PS21. 図形選択課題における情動刺激挿入と作業負荷増加の影響
和田一成（西日本旅客鉄道株式会社安全研究所）
上田真由子（西日本旅客鉄道株式会社安全研究所）
- PS22. 選択肢の空間的位置が注意と選好判断に及ぼす影響
大沼卓也（東北大学大学院文学研究科）
坂井信之（東北大学大学院文学研究科）
- PS23. リフレッシュ・キャンプが被災地児童の情動知能に及ぼす影響
庄子佳吾（独立行政法人国立青少年教育振興機構）
- PS24. ポジティブ感情による行動拡張効果の検討
菅原大地（筑波大学人間総合科学研究科）
- PS25. 情動知能特性と心の健康の検討—学生の専攻別による比較—
橋本由里（島根県立大学看護学科）
平井由佳[#]（島根県立大学看護学科）
- PS26. 特性不安と古典的分化条件づけ—皮膚電気条件づけ事態を用いて—
沼田恵太郎（関西学院大学大学院文学研究科）
宮田 洋[#]（関西学院大学名誉教授）
- PS27. 保護者の対人関係および子どもに対する働きかけの意識と保育園児の社会的行動
—子どもの笑顔に焦点を当てて—
福岡欣治（川崎医療福祉大学）
- PS28. 20代精神科看護師の感情と身体的拘束の見込みに関する研究
石井慎一郎（自治医科大学看護学部）
- PS29. 小中学生の5因子性格特性と抑うつとの関連
谷 伊織（東海学園大学人文学部）
- PS30. 選択による選好の上昇は刺激への注意の増加を伴う
—一事象関連脳電位を用いた検討—
木村健太（関西学院大学応用心理科学研究センター）
片山順一[#]（関西学院大学文学部）
- PS31. 感情刺激とオノマトペとの関連
野中陽一朗（広島大学大学院教育学研究科）
井上 弥（広島大学大学院教育学研究科）

発表要旨

若手研究者連続講演「集団間紛争と怒り」

5月31日(土) 13:00~14:30 多目的ホール

企画 石川隆行(宇都宮大学)・澤田匡人(宇都宮大学)

演者 遠藤寛子(筑波大学)

縄田健悟[#](九州大学)

司会 石川隆行(宇都宮大学)

遠藤寛子 「怒りの維持と他者への共感—言語化による新たな視点の獲得—」

従来、“怒り”に関しては“喚起”という観点から捉えられ、問題視されてきた。しかし近年、怒りの喚起のみならず“怒りの維持”についても関心が高まってきている。怒りが維持されると、わずかな不満にも敏感になり、攻撃行動が生じやすくなると指摘されている。また、このような状態に至ると、新たな対人葛藤を産むだけでなく、心身の健康状態を蝕むことが明らかにされている。したがって、怒りの維持状態を適切に低減させる制御方法の開発が重要な課題となる。

本講演では、怒りを維持させる主な要因として“思考の未統合感”を挙げ、他者への共感との関連について、調査および実験研究を踏まえながら論じる。まず、怒りがどのような過程を経て維持されるのかについての調査研究を紹介する。次に、“言語化”という観点から維持された怒りの低減効果について論じ、どのような視点から言語化すれば思考の未統合感の減少、ひいては怒りの低減につながるのかについて考察していく。

ここで言及される“思考の未統合感”とは、“過去の出来事に対して目指すべき方向に解決されていない、受容できない、脅かされる”という感覚である(遠藤・湯川, 2011, 2012, 2013)。また、この未統合感は、何度も繰り返し考えるという“反復思考”や、思考から離れようとする“回避行動”を通じ、怒りの維持をもたらす。言い換えれば、維持された怒りを低減するには、出来事に関する思考が未統合な状態から脱却し、統合された状態へと移行しなくてはならない。

こうした思考の未統合感の低減に重要な役割を果たしているのが、他者への共感である。講演者が行った調査研究では、怒りを感じた相手に対して、“関係を保っていきたい”という意志があるほど、自己を変えようとする欲求が生じたり、相手の視点に立って過去の出来事を捉え直したりすることが明らかにされている。また、実験研究においても、怒りを感じた相手の視点に立つ言語化が思考の未統合感を減少し、怒りの低減につながっていたことが示されている。ここから、他者に対する共感を含めた言語化により、善悪・好悪という単一的な視点を超えて、他者の立場や状態などを加味した多様な視点を取得し、自己と他者という二者関係を新たに捉え直すことが可能となる。

以上のような研究知見・考察を踏まえて、本講では最後に、個人内に留まらず個人間や世代間で怒りが維持されていく過程について論じる。さらに、教育的、臨床的場面にどのように貢献しているかについて、今後の展望を交えながら議論する。

縄田健悟 「“我々”としての感情とは何か？

—集団間紛争における情動の役割を中心に—

人は自分に不公平に扱いをされれば怒りを覚え、自分の身の危険に際しては恐怖を覚え、自分の仕事を高く評価されれば喜びます。この意味で人の感情は、自分に関する出来事から生じるものだと思います。

しかし、人は自分だけではなく、他者に起きた出来事に対しても、感情が喚起されます。この他者から生じる感情の側面の一つは、もう一つの連続講演でも扱われる共感であり、心理学でも一大潮流を形成している研究領域ですが、本講演では、集団という視点から「我々としての感情」を考えていきたいと思います。

たとえ自分とは直接の関連がなくとも、人は自分の所属集団に対する出来事で一喜一憂します。自分の大学のスポーツチームが優勝すれば誇らしく感じ、自分の会社が侮辱されれば怒りを感じます。このように人は自分の所属集団に起きた出来事から集団ベースの感情が喚起されることがあります。

このような集団レベルの感情は様々な社会場面で生じるものですが、特に重要となるのが集団間紛争場面です。集団間紛争とは、集団と集団の間で生じる争い事のことであり、戦争や民族紛争、組織の部門間対立や不良集団間の諍いなどが挙げられます。例えば、イスラエルの空爆によってあるパレスチナ人が死亡したときには、同じパレスチナの人々は、まるで自分が被害を受けたかのように怒りや憎しみ、悲しみを感じ、ときには自らの命をかけた報復的自爆攻撃が行われることさえあります。集団の一員であることによって怒りや恐怖の感情は喚起され、そしてそれは“感情的”だからこそ集団間紛争は容易には解決されません。

演者はこれまで、社会心理学や集団力学の視点から集団間紛争を研究してきました。本講演では、社会心理学の理論研究としての集団間情動理論と、現実の集団間紛争場面を題材にした調査研究に関する国内外の知見を紹介いたします。その中で、紛争場面において集団レベルの情動が担う役割に関してフロアの先生方を交えて議論を行いたいと考えています。

シンポジウム1「いじめと文化」

5月31日(土) 15:00~17:00 多目的ホール

企画 澤田匡人(宇都宮大学)・石川隆行(宇都宮大学)

シンポジスト 池上知子(大阪市立大学)

金網知征[#](甲子園大学)

一言英文(関西学院大学)

司会 澤田匡人(宇都宮大学)

指定討論者 米山正文[#](宇都宮大学)

池上知子 「平等主義文化における排斥と蔑み」

いじめの様態はさまざまあり、その定義も識者によって一貫しないことが多い。本発表では、いじめの本質は「異質な存在に対する排斥と蔑み」であるにとらえ、いじめ行為の社会心理学的背景について考察したい。平等主義教育がゆきわたっている現代社会では、大人も子どもも、自分たちと異なる社会的背景を持つ者、自分たちにはないハンディキャップを背負っている者に対しても、同じ人間として平等に接するべきであるとの理念は共有されていると考えられる。けれども、そのような理念とは裏腹に、往々にして、こうした者たちがいじめの対象とされやすい。それはなぜかを、社会的アイデンティティ理論の視点から考えてみたい。

社会的アイデンティティ理論に基づけば、人は、自分が所属し自己同一視している集団(内集団)の価値を高く評価することによって自尊心を維持しようとすると考えられる。その際、自分が所属する集団とは異なる集団(外集団)との差異化をはかることで所属集団の価値を優位に保とうとする心理機制が働く。それは、内集団の価値を脅かす外集団を否定し、排除しようとする態度に表れる。加えて、内集団と外集団の差異が不明確になり、両者を弁別することが困難になると、その傾向は一段と強まる。集団所属性にもとづく自尊心が脅威にさらされることを意味するからである。たとえば、男性同性愛者は、男性でありながら男性規範から逸脱した性指向をもつゆえに、男性異性愛者からは、男性アイデンティティを脅かす存在とみなされやすいと言われている。ところが、男性同性愛者と男性異性愛者の間には生物学的に決定的な相違があると知らされると、そのような脅威が低減し、男性異性愛者がジェンダー自尊心を防衛するために取る男性同性愛者に対する否定的態度が緩和されることを示す研究が存在する(Falomir-Pichastor & Mugny, 2009 など)。そこには、平等主義的人間観と社会的アイデンティティの維持、防衛との間で葛藤する人間の複雑な心理が見て取れる。これは、セクシャル・マイノリティをめぐる問題に止まらず、さまざまないじめ行為(排斥と蔑み)に共通に潜む心理かもしれない。本発表では、セクシャル・マイノリティへの嫌悪と不安を示す実際の事案に触れつつ、社会心理学における実証的研究を例に挙げながら、「異質な存在」を人はなぜ蔑み、排除しようとするのか、どのような場合に「異質な存在」に対して人は寛容になれるのかを考察する。そうした議論を通して、いじめ行為の本質に迫るとともに、問題の解決に向けて糸口を探りたい。

金網知征 「いじめを通してみた日英子ども文化比較」

いじめ／Bullying は、一般に「被害者加害者間の力の不均衡性と行為の反復性に特徴づけられる攻撃行動の下位分類」(Olweus, 1999) と定義され、北欧諸国を中心に始まった研究は今や全世界的問題として広く議論されている。ところが、こうした定義や理解は、西洋諸国を中心としたものであり、異なる国や文化圏によって必ずしも一致するものではない (Smith, Kanetsuna, Koo, 2007)。一部の研究者たちは異なる文化間における“いじめ”の本質的な共通性を強調するが、別の研究者たちは例えば、日本の“いじめ”と、欧米諸国の“Bullying”とは根本的に異なる主張している。いじめを日本独自の問題として捉え日本的状況を過度に誇張することは誤った事実認識や解釈につながる恐れがあるが、一方で、文化的背景や学校教育制度等の違いを無視して安易に他国の対策を模倣しても効果は期待できない。

これまでの研究によると、英国をはじめとする欧米における“Bullying”は一般に身体が大きく力の強い上級生などによって行われる身体的・言語的攻撃を中心とした個人ないしはごく少数のグループによる直接的な行為と理解されており、その背景にあるのは個の自己顕示欲求であると考えられている。一方、日本の“いじめ”は教室を主戦場とし、クラスメートを主とした同級生によって行われる関係性攻撃を中心としたより集団的かつ間接的な行為であると理解されている。森田 (1986) はこうした日本のいじめの特徴を「同一集団内の相互同質化過程における異質者への排除の圧力」であると説明し、その背景には教室という閉ざされた環境があることを示唆している。実際に、日本の子ども達は、自身が所属するクラスを基本に友人関係を形成し、学校環境に限定すれば、授業時間外の殆どの時間を自教室で同クラスの友人と過ごしていることが明らかとされている (Kanetsuna, 2004)。このような物理的にも社会的にも閉ざされた環境の中で、子ども達は、相互に監視し合い、その環境の中で“間違えた”行動をしないように細心の注意を払いながら生活している。もしかか一つでも“間違えて”しまえば、皆から一斉に制裁を受けることになるからである。いじめ場面における責任の所在を尋ねた調査 (Kanetsuna, 2004) によると、被害者に対して否定的な感情を向け、その責任を被害者自身に帰属する傾向は日本の子ども達に顕著であることが示されており、いじめが“間違えた”行為に対する制裁の手段として使われていることを示唆している。このような環境の中では、いじめに加担することや、見て見ぬ振りをするすら“正解”となる。

本発表では、日英のいじめ／Bullying の諸特徴を子ども達の視点から概観しつつ、環境がいじめ行為に与える影響について考察し、今後の課題や対応について検討したい。

一言英文 「いじめと文化的心性との交点」

この講演では、互いに交絡するいじめの普遍的側面と文化的側面に焦点を当て、現代とこれからの日本社会において重要となる社会・文化的観点について、感情心理学、社会心理学と比較文化心理学の研究と諸概念を引き合いに論考する。

いじめは、国や年齢を超えて偏在する、社会的勢力や社会的比較に関連した感情と社会心理の問題と捉えることができる。例えば澤田(2006)による「妬み」の研究では、いじめの加害者に「悪

性妬み(malicious envy)」の過敏性があることに着目し、シナリオによる実験的操作や他者評定を基準とした検討により、いじめに社会的比較感情の問題が潜在することや、それらがいじめ行動の背後にあることを示した。Keltnerら(1998)は、「社会的勢力(social power)」の違いが否定的な「からかい(teasing)」に繋がることを示しており、Piffら(2009)は、高い社会階層に代表されるコントロール感や欲望に対する肯定的態度が「自己中心主義(solipsism)」に繋がるとし、プライミングを用いた非倫理的行動の研究を行なっている。

いじめに底流するこれらの感情心理学・社会心理学的要因は、さらに文化的文脈に埋め込んだ理解が必要である。たとえば、社会的比較の対象者や比較内容、対処行動は文化によって異なり(高田, 2011)、日本の学生では特に自分が「人並み」でないことに「恥」を感じる(永房, 2002)。森田・清水(1994)による「いじめの四層構造」の研究では、欧州圏に比べ日本では中学生の時期にいじめを仲裁する者が減少し、傍観する者が増加する特徴がある。日本では社会的勢力の強い者ほど「怒り」を表出し(Kitayama, under review)、関係からの排除の危険と隣り合った対人関係を保ち(Kashima & Hitokoto, 2009)、他者に迷惑をかけまいと関係懸念(relational concern; Taylorら, 2004)により援助要請を抑制し、調和を保つため否定的な感情を抑制することがあり(Murata, Moser, & Kitayama, 2012)、これらは日本のいじめ問題において考慮する価値のある文化的要因である。

また、過去半世紀にわたる日本の急速な個人主義化によって、若者や異文化経験者を先駆けとして権力格差(Hofstede, 2001)に関する価値観のずれ違い(Kawakami & Glazer, 2011)が生じている可能性、いじめに対する心理的反応自体が文化によって異なる可能性(Lohら, 2010)、および、対人関係の調和に変容が見られる可能性(Hitokoto, under review)についても論考する。

シンポジウム2「共感と紛争」

6月1日(日) 13:00~15:00 多目的ホール

企画 中村 真(宇都宮大学)・石川隆行(宇都宮大学)

シンポジスト 長谷川寿一[#](東京大学大学院)

遠藤由美[#](関西大学)

清水奈名子[#](宇都宮大学)

司会 中村 真(宇都宮大学)

指定討論者 大平英樹(名古屋大学大学院)

長谷川寿一 「動物における『紛争(もめ事)』解決と共感性の生物学的起源」

様々な動物において社会生活や集団生活が観察されるが、鳥類や哺乳類における社会性のメカニズムとしては、捕食者からの防御、効率的な採食(餌情報の共有)、協同繁殖、集団なわばりの確保などが挙げられる。社会を維持する上で、集団内ではさまざまな親和行動(毛づくろいや挨拶行動など)や援助行動(警告声や養育援助行動など)などが発達しているが、他方、集団内のメンバー同士で資源(餌や配偶者など)や順位をめぐる競争や攻撃的な相互作用といった「紛争(もめ事)」も頻発する。集団内でのもめ事は、社会ストレスとして作用し、個体の健康状態を損ねるといった報告もある(ときには仲間からの攻撃で死に至ることさえある)。このようなもめ事による社会ストレスを緩和する行動として、社会的抗争後に多様な相互作用が見られ

Post-conflict Behavior(葛藤解決行動)と総称される。具体的には、争った二個体間がその直後に示す親和行動(Reconciliation:仲直り行動)、第三者が優位個体を宥める行動(Appeasement:宥和行動)、第三者が劣位個体を慰める行動(Consolation:慰撫行動)が霊長類を中心に報告されている。とくに仲直り行動は、霊長類以外でもヒツジ、ブチハイエナ、ライオン、イルカ、イヌ、マングースなどで広く観察される。他方、動物における慰撫行動の報告は断片的であるが、ヒト園児の観察においては、慰撫行動が5歳児において発達すると報告されている。

紛争解決の礎に横たわる共感あるいは同感、人の高度な社会生活を可能にする最も基本的、原初的な道德感情として、古くから議論されてきた。アダム・スミスは、『道徳感情論』において、他者に同感を感じ、他者から同感を得るように振る舞うことをもとに社会に秩序が生まれると論じた。また、ダーウィンは、『人間の進化(由来)』において、共感について「社会的本能の最も重要な一要素として自然淘汰によって発達したことは、疑いえない」と述べている。近年、思いやりや共感、同情に関する進化的・神経科学的研究が急速に発展し、平成25年度からは新学術領域研究『共感性の進化・神経基盤』(代表:長谷川寿一)もスタートした。そこでは、共感性を情動伝染(快・不快感情の同期)、共感(動物界の援助行動など自動的無自覚的な他者感情の認知と行動調整)、同情(他者の感情理解と自覚的な行動調整)を連続的なシステムと捉え、共感性の起源をヒト以外の動物にも見出し、進化過程におけるヒト特有の共感性の成立機構を明

らかにすることを目的としている。本発表では、向社会行動の生物学的基礎に学際的にアプローチする枠組みについて紹介してみたい。

遠藤由美 「共感の社会的パースペクティブ」

「共感」という語は善良な響きをもっている。Batson(1991)は、共感が向社会的行動への動機づけを高めるといふ、共感を起点とする一連の過程を共感-愛他性仮説として唱えた。現実には、時間などの制約的条件ゆえに向社会行動は必ずしも実現しないかもしれないが、十分な共感があれば少なくともその他者のために動こうとするだろう、というものである。その後ミラーニューロンの発見(Rizzolatti et al., 1996)を契機として、共感研究は神経科学などを中心に大きく増加した。そして、人は生物学的基盤に裏づけられた他者への共感能力を備えており、個人差がありながらも、その能力を基に基本的には人々が相互に支え合う社会が構成され維持されている(Keltner, 2009)と考えられるに至った。つまり、共感とは人々を他者の福祉安寧を気遣う愛他的で善良な道徳人にし、向社会的すなわち社会に資するものとして評価されている。

共感とは友情の重要な要素である。しかし、現代は交通・通信技術の進歩などにより世界は拡大しつつあり、仲間だけでなく地理的遠隔地の「異質な」人々とも共生しなければならない時代となった。このような現代社会の性質を考慮すると、共感とは異なる様相を示す。第一に、共感とは差別主義者である。実際、脳は内集団成員や憧憬人物など自分が好意感情を抱くことができるような人物とそうでない人物とを区別し、誰かの困った状態にではなく、苦境にある者が誰かということに応じた反応を示す。つまり、共感とは相手を選ぶ。歴史上これまで数多く存在し現在なお克服できずにいるものとして、内集団の犠牲者への共感を通して集団が結束し、外集団への憎悪から報復する集団間の対立・紛争の構図がある。仲間犠牲者への共感とは、脅威に対する不安や恐怖などの感情と相まって外集団を“敵”と認定することで、人々を対立・紛争へ、そして応酬の負のスパイラルへと向かわせる。第二に、共感とは視野狭窄的である。特定の対象への強い共感とは、それを一旦横において、全体を眺めることを困難にする。それによって、援助の必要性が高い人々が他にもいる現実を見えにくくしがちである。また、それらの人々について知るには主としてメディアの情報に依存せざるを得ない。メディアの情報の取捨選択や提示法には政治的・経済的論理や思惑が入り込み、共感とはそれによって操作され、正義や公正が歪む可能性が生じる。

現代社会において、共に生きる親密な他者と「異質な他者」の心をどのように理解するのか、共感の性質とメカニズムをさらに明らかにする必要がある。他方、サニーサイドとダークサイドをあわせもつ「共感」の特徴をふまえ、共感だけに依存しない対立・紛争の抑制システムをcross-cuttingな研究と取り組みを通して創出することが求められる。

清水奈名子 「武力紛争研究における感情の位置づけ」

多くの犠牲者を生む武力紛争がなぜ発生し、それらをどのように解決するのかという問題は、報告者の専門とする国際関係論をはじめとして、国際関係に関する学問における最も重要なテーマとして、長年研究されてきた。しかし、これらの学問分野における主要なアクターは国家であ

るとされてきたため、研究対象となるのは国家の行動や国家間の関係であり、紛争と個人または人間集団が抱く感情の関係性については、十分な考察が行われてきていない。

しかし、数千万人という犠牲者を出した二度の世界大戦をはじめとして、現代まで続くパレスチナやシリアにおける内戦や、カンボジアやルワンダにおけるジェノサイド（集団殺害）など、武力を用いた紛争の背景には、敵対する集団への怒りや恐れ、また嫌悪等が、さらに帰属する集団への愛着等があることは、紛争経験者の個人的な記録や証言、文学作品などを通して明らかになってきた。また、これらの感情を政治的な目的をもって意図的に喚起することで、人々が戦闘行動に参加するように動員していく手法も、ナチスドイツのプロパガンダに典型的にみられたように、20世紀以降急速に発達してきている。これらの事例を考えれば、紛争と感情の関係については、心理学と国際関係分野の学問が連携して研究していく必要があると言えるだろう。

本報告では、紛争と共感の関係性に注目をして、主に以下の2つの論点について考えたい。第一の論点は、紛争が発生し、または激化していく過程における共感の役割である。戦闘行為に人々を動員していく際に政治勢力が用いるのは、自分が帰属する集団が敵対集団によって攻撃され、犠牲者を出した経験の喧伝であることが知られている。同じ集団構成員の犠牲者の写真や映像は、自分が直接攻撃を受けていないにもかかわらず、人々に悲しみや敵対集団への怒りを引き起こし、その結果として紛争発生や激化をもたらす場合がある。自集団内の被害経験への共感が、敵対集団への怒りや恐れ、嫌悪を引き起こす可能性をどのように考えればよいのだろうか。

第二の論点は、紛争を解決するうえでの共感の役割である。自分が攻撃する敵対集団の構成員であっても同じ人間であり、その命や尊厳を奪う行為を思いとどませようとする倫理的、道徳的な影響力としての共感、武力紛争という過酷な事態に際してどのような機能を果たすのだろうか。特に、軍隊や武装集団などの組織的な命令体系のなかで遂行される武力紛争において、個人が敵対集団の人間の苦しみを認知し、共感を覚えた結果、個人の良心に依拠して攻撃を思いとどまる、または紛争の解決へと具体的な行動を起こすことは果たして期待しうるのだろうか。

日本国内においても、外国人やマイノリティーなどを標的とするヘイトスピーチやヘイトクライムが社会問題化するなか、紛争と共感の関係性について考察することは、日本社会の現代的な課題でもあると言えるだろう。また報告のなかでは、紛争地から日本に避難した経験をもつ関係者の証言も取り上げる予定である。

一般研究発表

5月31日（土） 大会1日目 口頭発表①

OS01. 顔表情からのネガティブ感情認知における日タイ異文化

堀本美都子（神戸大学国際文化学研究所）

米谷 淳（神戸大学大学教育推進機構）

本研究では、在タイ日系企業で働く日本人の観察をもとに、タイ人がなぜ日本人は怒りやすいと感じるのかを検討するため、日本人とタイ人のネガティブ表情（悲しみ、嫌悪、怒り、恐れ）と無表情を刺激として提示し、日本人とタイ人に識別させた。その結果、怒りの表情の識別については、日本人とタイ人に違いが認められないが、タイ人が日本人の無表情を識別する際、タイ人の無表情より怒りと誤認しやすい傾向があることがわかった。

OS02. 他人を見下す人は他人の不幸も喜ぶのか？

—仮想的有能感の類型別に見る妬みとシャーデンフロイデの関連—

藤井 勉（Sungshin Women's University）

澤田匡人（宇都宮大学教育学部）

本研究は、自尊心と他者軽視傾向との組み合わせによる「有能感の4類型」に焦点を当て、妬みとシャーデンフロイデとの関連を検討した。92名の参加者を対象にシナリオ実験を行った結果、特に自尊心が高く他者軽視傾向の低い「自尊型」と呼ばれる群の参加者のみ、妬みとシャーデンフロイデとの関連がみられなかった。他の類型ではもれなく両者が正の関連を示しており、自尊型が適応的な特徴を持つことの傍証が得られた。

OS03. 文化的自己観、アレキシサイミア、身体感覚／感情の弁別的明瞭性の関係

金井雅仁（筑波大学大学院人間総合科学研究科）

湯川進太郎（筑波大学人間系）

本研究は、日本人において、文化的自己観がアレキシサイミアとどのように結びつくか、文化的自己観がどのような過程を経て不明瞭な感情弁別に繋がるか、の2点を検討した。その結果、相互独立的自己観は感情伝達困難、外的志向と関連し、相互協調的自己観は感情同定困難、感情伝達困難と関連した。また、相互協調的自己観の高さが感情同定困難の高さと不明瞭な身体感覚弁別を経て、不明瞭な感情弁別に繋がる可能性が示唆された。

OS04. 真偽判断に及ぼす制御焦点の影響

小形佳祐（東北大学大学院文学研究科）

阿部恒之（東北大学大学院文学研究科心理学講座）

制御焦点理論における利得接近・損失回避志向が真偽判断に与える影響を検討した。214名の参加者は促進予防焦点尺度（尾崎ら，2011）に回答したのち、「女性に生まれてよかったこと」というテーマに答えた20個の記述文に対して、それが嘘つき（男性）によって書かれたものか否かという判断を下した。その結果、想定された真偽判断に対する制御焦点の影響は確認されず、女性のほうが男性よりも弁別力が有意に高いという性差が示された。

OS05. シニア健康開発に心理学リテラシーを考案する実践への検証

—本人記述データと「感情」研究の交流におけるモデル設定—

糸魚川幸宏（Wisdom Inc）

記述データは想起，メディア刺激，文章刺激などで発生し金融パニック，東日本大地震以降の状況記述を生んだ。自己記録としての人生記録が抑えた感情から生まれた本人記述と「感情」研究の分野との交流を検証し具体的に町での健康開発のプロセスを心理学リテラシーとして組み立てることを論考した。

6月1日（日） 大会2日目 口頭発表②

OS06. 派生的感情および二重抑制と精神的健康の関連性

井ノ川侘果（筑波大学大学院人間総合科学研究科心理専攻）

山口正寛（東京未来大学こども心理学部こども心理学科）

湯川進太郎（筑波大学大学院人間総合科学研究科）

ある出来事によって生じた感情を抑制することで二次的に生じた感情は“派生的感情”と呼ばれ，その派生的感情を抑制することは“二重抑制”と呼ばれる。本研究では，大学生253名を対象に質問紙調査を行い，派生的感情および二重抑制と精神的健康の関連性について検討した。その結果，元々の感情を抑制するよりもむしろ，派生的感情の体験頻度と二重抑制頻度が精神的健康にネガティブな影響を与えている可能性が示された。

OS07. 特性尊敬関連感情尺度の作成の試み

武藤世良（東京大学大学院教育学研究科／日本学術振興会）

尊敬に関わる感情（尊敬関連感情）の感じやすさを測定する尺度の作成を試みた。作成した尺度と、理論的に関連が予測される既存の尺度（アタッチメント・スタイル、Big Five、自尊感情、自己愛傾向）で構成された質問紙調査を大学生 368 名に実施した。分析の結果、特性尊敬関連感情尺度は特性尊敬、特性心酔、特性畏怖の 3 因子構造として解釈でき、それぞれが他の心理尺度と異なる関連を見せることが明らかとなった。

OS08. 現場実験によるゴミの不法投棄抑制要因の検討

中俣友子（東北大学大学院文学研究科）

阿部恒之（東北大学大学院文学研究科心理学講座）

過去の実験で得られた成果を踏まえ、実際の河原における現場実験を実施した。景観（更地、草むら）と看板（目の絵・監視カメラ設置の文字表示・無し）の 2 要因を設定し、5 か月間に亘って条件別のゴミの不法投棄量を測定した。その結果、景観については更地、看板については目の絵を記した看板の条件でゴミの量が少なく、特に目の絵の看板の効果が顕著であった。＊本研究は学部 4 年生の中山なつみさんの協力を得て実施した。

OS09. 羞恥表出者に対する観察者のパーソナリティ評価

—失敗状況および成功状況を用いた検討—

福田哲也（広島大学大学院教育学研究科）

樋口匡貴（上智大学総合人間科学部）

本研究では、2 つの状況（表出者が失敗した状況と成功した状況）と 4 つの表情（3 つの羞恥表情と無表情）を組み合わせたシナリオを回答者に呈示し、各表情を示した人物についてパーソナリティ評価を求めた。各状況において表情間の差異を検討したところ、利己性の結果が特徴的であった。羞恥表情は、失敗状況では無表情と同程度利己的と評価されていたが、成功状況では無表情よりも利己的でないと評価されていた。

OS10. （発表取消）

OS11. サイコパシー傾向者は他者から嫌われることをどう認知しているか？

河野和明（東海学園大学人文学部心理学科）

羽成隆司（椋山女学園大学文化情報学部）

伊藤君男（東海学園大学人文学部心理学科）

対人嫌悪には利己的な他者を排除する機能があると考えられ、互惠制維持に貢献していると思われる。サイコパシー(PP)傾向者は互惠制を脅かす可能性がある。では、PP傾向者は「他者から嫌われること(被嫌悪)」をどう認知しているのだろうか。被嫌悪回避傾向とPP傾向を測定した結果、一次性PPと被嫌悪回避傾向は、女性のみを負の相関がある一方、二次性PP傾向には男女とも正の相関があることが明らかとなった。

OS12. 特別な呼吸法の事前実施が緊急事態時の行動を改善させる

上田真由子（西日本旅客鉄道株式会社安全研究所）

和田一成（西日本旅客鉄道株式会社安全研究所）

臼井伸之介[#]（大阪大学大学院人間科学研究科）

我々の先行研究では、緊急事態になると、「深く考えず、粗略な行動をとる」傾向へと変化することがわかった。そのため、本研究では、Breathing Retraining（呼吸再訓練）法という特別な呼吸法を事前実施することで、その不安全な行動にどのような影響を及ぼすのかを検討した。その結果、呼吸法を実施すると、実施しない場合と比較して「ある程度迅速で、思慮深い行動をとる」ことが示された。

6月1日（日） 大会2日目 口頭発表③

OS13. 対人間の制御に関する知覚制御理論的考察

金築 優（法政大学現代福祉学部）

金築智美[#]（東京電機大学工学部）

対人間の行動の機能をどのように捉えるかは、社会的共生のあり方を考える上で重要である。本演題では、対人間の行動の機能を、知覚制御理論（Powers, 1973）の観点から考察する。この理論は、人を様々な目標を達成しようとする制御システムとして捉える。一方、この理論は、他人の目標を配慮せずに、他人を自分の目標だけに沿わせることの弊害を強調する。当日は、知覚制御理論による社会的共生への示唆に言及する。

OS14. 逸脱行動に対する感情評価の検討—災害時の創発規範—

Wiwattanapantuwong Juthatip (東北大学文学研究科心理学講座)

阿部恒之 (東北大学大学院文学研究科心理学講座)

非常時に形成される創発規範 (emergent norm) の特徴を、感情の観点から明らかにすることを目的として、東日本大震災の被災3県と災害の少ない3県の成人男女3,836名を対象とするインターネット調査を行った。同じ逸脱行動に対し、平時と災害時における許容性と感情評価(怒り・恥)について評価を求め、性別・地域差などを検討した。その結果、災害時には逸脱行動への許容性が変化し、地域差・性差もあることが認められた。

OS15. 身体意識尺度の作成

馬 艶青 (東北大学文学研究科心理学講座)

身体意識を広範にとらえる新たな尺度の作成を試みた。大学生215名を対象に45項目の質問紙を実施し、因子分析(主因子法, プロマックス回転)を行った。その結果、「公的身体意識」、「私的身体意識」などの5因子が抽出された。各因子から因子負荷量の高い5項目を選択し、25項目の身体意識尺度を作成した。この尺度における性差を検討したところ、女性の公的身体意識は、男性に比べて有意に高かった。

OS16. 運の知覚の事前操作がギャンブル時の感情と行動に及ぼす影響

高田琢弘 (筑波大学大学院人間総合科学研究科/日本学術振興会)

湯川進太郎 (筑波大学人間系)

本研究は、運の知覚の事前操作が、ギャンブル行動(リスク・額・速さ・止め時)、感情状態、運の知覚の変化に及ぼす影響について、実験的に検討した。実験参加者には、ギャンブル課題(Game of Dice Task-Revision; 高田・湯川, 2013)に取り組みてもらい、課題前に、(事前に操作された)くじ引きによる運の知覚の操作を行った。実験計画は、一要因三水準の参加者間計画(幸運群, 普通群, 不運群)であった。

OS17. 自然に対してなぜ感動するのか? : 死の顕現性仮説からの検討

樋口匡貴 (上智大学総合人間科学部)

柳川美貴# ((株)日立ハイテクソリューションズ)

福田哲也 (広島大学大学院教育学研究科)

美しい星空やオーロラなどを見ると感動することがある。この自然に対する感動に対して、死の顕現性が及ぼす影響を検討した。大学生40名を対象とした実験を行い、身体的および精神的な死の顕現性を操作し、その後自然現象に関する映像を視聴させ、そこで感動を測定した。その結果、精神的に死の顕現性を増加させる操作が自然に対する感動を増加させることが示された。一方で身体的な死の顕現性は感動には影響しなかった。

5月31日(土) 大会1日目 ポスター発表①

PS01. メール・コミュニケーションにおける顔文字の交換過程が対人感情に及ぼす影響

木村昌紀 (神戸女学院大学)

山本恭子 (神戸学院大学)

本研究は、顔文字の交換にも返報性が期待されると仮定し、顔文字の交換過程が対人感情に及ぼす影響を検討した。研究1は提案が拒否される状況で、自身の提案メールの影響はなく、相手からの拒否メールに付与された顔文字のみ、ネガティブ感情を緩和していた。研究2は他者に謝罪する状況で、顔文字の返報性によるポジティブ感情の喚起に加えて、自分の期待に反した、相手からの顔文字付与によるポジティブ感情の増幅が示された。

PS02. タイ人はラフカディオ・ハーンの「日本人の微笑」をどう解釈するか。

POTHISITHPORN TIPPAYARAT (神戸大学国際文化研究科)

米谷 淳 (神戸大学大学教育推進機構)

林 萍萍 (神戸大学国際文化研究科)

「日本人の微笑」(Hearn, 1894)の発表以降、日本人が人前でよく微笑むことが欧米人によく知られるようになった。その論説では、欧米人は日本人が苦しみ、恥、切望などの際に出る表情(微苦笑)を理解できず、しばしば誤解すると論じられている。本研究は、その論説にある3つの場面をタイ人大学生に読ませ、微笑みの解説を調べ、日本人大学生の結果と比較した。その結果、日本人との違いが認められた。

PS03. ネガティブ感情間における喚起場面の相違—大学生の持つ感情観について—

佐藤重隆 (東洋大学大学院)

戸梶亜紀彦 (東洋大学社会学部社会心理学科)

ネガティブな個別の感情状態(怒り/不安/悲しみ/嫌悪感)が喚起される場面について、大学生を対象として、自由記述法を用いた調査を行った。調査対象者の記述に対して、研究協力者によるKJ法を用いた記述内容の分類が行われた。この分類の結果から、それぞれのネガティブ感情状態において、多様な喚起場面が示され、通常あまり想定されない状況に関する内容も抽出された。また、対象者の属性により記述内容に異なる傾向があった。

PS04. 悲しみ評価尺度の作成および6種類の悲しみ喚起場面における評価の検討

白井真理子（同志社大学大学院心理学研究科／日本学術振興会）

鈴木直人（同志社大学心理学部心理学研究室）

悲しみは、単純なネガティブ感情ではなく複雑な側面を持つ感情である。既存の尺度では、複雑な悲しみの特徴を捉えるには不十分であるとの問題点を踏まえ、悲しみを表現する言葉から悲しみ評価尺度を作成した。さらに、6種類の悲しみ喚起場面における評価の違いを明らかにすることで悲しみの質的な違いについて検討することを目的とした研究を行った。その結果、大きく2つの異なる特徴を持つ質の異なる悲しみの存在が示唆された。

PS05. 悲しみに対する態度尺度作成の試み

杉浦悠子（愛知淑徳大学心理医療科学研究科）

清水 遵（愛知淑徳大学心理学部）

小川一美（愛知淑徳大学心理学部）

悲しみには幾つかの過程が存在し、人を悲しみ体験から解放するための援助方法も、悲しみの過程によって異なると考えられている。しかし、その過程の存在を明らかにする客観的な指標はない。そこで、大学生を対象に、過去の悲しみ体験に対する現在の態度について調査を行い、尺度構成を行った。因子分析の結果、5つの因子（“転換・前進”，“悲哀・停滞”，“甘受・整理”，“回避”，“後悔”）が抽出された。

PS06. 認知的感情制御と抑うつ・不安の関連—メタ分析による検討

榊原良太（東京大学大学院教育学研究科）

感情制御と精神的健康の関連については、近年多くの研究が行われているが(Gross, 2013), なかでも再評価や気晴らしをはじめとした、認知的感情制御への注目は一層高まっている。本研究では、認知的感情制御の代表的な尺度である Garnefski et al. (2001) の CERQ を用いて行われた、従来の知見のメタ分析を通じて、認知的感情制御と抑うつ・不安の関連の検討を試みた。

PS07. IAPS のカラー／モノクロ呈示時の感情喚起効果

—感情リアルタイム評定による検討—

櫻井優太（愛知淑徳大学心理学部）

清水 遵（愛知淑徳大学心理学部）

色は人間の心身に影響を与えることが知られているが、感情喚起スライド（IAPS）の感情喚起効果は、カラー呈示とモノクロ呈示で同等であるという報告がある（Codispoti et al., 2012 など）。これらの研究では、刺激呈示後に行う主観的感情評定法を用いて検討していた。本研究では、感情をリアルタイムに評定させる方法を用いて、カラー呈示とモノクロ呈示における刺激呈示中の感情変動を比較した。

PS08. 持続的な不信感の神経相関

鈴木敦命（名古屋大学大学院環境学研究科）

木山幸子[#]（国立長寿医療研究センター）

國見充展[#]（国立長寿医療研究センター）

大平英樹（名古屋大学大学院環境学研究科）

川口 潤[#]（名古屋大学大学院環境学研究科）

中井敏晴[#]（国立長寿医療研究センター）

ある人物の悪い評判を学習すると、後にその内容の忖意性が判明しても、その人物への不信感は持続する。そうした持続的な不信感の神経相関を検討するため、本研究では、未知の人物の評判を学習した後、その評判が忖意的であることを伝えた上でその人物の信頼性を再判断している間の神経活動を機能的磁気共鳴画像法で測定した。その結果、無視すべき悪い評判に影響された信頼性判断は島皮質の活動と関連があることが示唆された。

PS09. 対人場面における聞き手の態度が話し手の生理反応に及ぼす影響

中川紗江（同志社大学大学院心理学研究科／日本学術振興会）

鈴木直人（同志社大学心理学部心理学研究室）

本研究は、対人場面における聞き手の態度が、話し手の生理反応に及ぼす影響を検討した。聞き手（実験協力者）の態度を無視群、うなずき群、共感群に振り分け、話し手（実験参加者）がスピーチ課題を行っている間の生理反応を測定した。その結果、うなずき群において収縮期血圧および拡張期血圧が時間の経過とともに有意に低下した。したがって、聞き手のうなずき態度が話し手の血圧上昇を軽減させることが示唆された。

PS10. 面子が潰されるとどう感じるか—質問紙法による中日比較—

林 萍萍 (神戸大学国際文化研究科)

米谷 淳 (神戸大学大学教育推進機構)

中国人は非常に面子を重視すると言われている。中国人が面子を潰されたとき、どのような感情を感じるだろうか。また、感情の強さに、場面、観衆、行為者がどのような影響を及ぼすだろうか。中国人と日本人を対象に質問紙調査を行い、11 の場面における 3 通りの観衆と 4 通りの行為者の組み合わせについて、7 つの感情の強度を評定させた。その結果、場面、観衆、行為者及び文化の主効果が有意であった。

PS11. 教師の受容的態度および学級での三者関係が児童の感情に及ぼす影響

大久保智生 (香川大学教育学部)

本研究の目的は教師—当事者の児童—他の児童という三者関係に焦点を当て、教師の受容的態度が児童の感情に及ぼす影響を場面別に明らかにすることであった。小学生 4～6 年生 822 名が調査に参加した。その結果、三者間すべての関係性が受容的態度に対する児童の感情に対して影響を与えているということが明らかとなった。また、他者の存在、場面、三者関係の特徴によって児童の感情に差がみられることが明らかとなった。

PS12. アタッチメントと感情的共感性の関連—ポジティブ・ネガティブ感情に着目して—

今野仁博 (岡山短期大学)

近年、共感性の感情的側面において、他者のネガティブ感情のみならず、他者のポジティブ感情に対する共感性が注目されている。本研究では、他者のポジティブ感情とネガティブ感情に対する共感性を別々に捉えた上で、アタッチメントとの関連を多面的に検討した結果、愛着回避は他者のポジティブ感情に対する共感性、愛着不安は他者のネガティブ感情に対する共感性と関連があることが示唆された。

PS13. マグレガー「Y 理論」の基礎に関する覚書—1946 年論文を中心に—

村田晋也 (九州国際大学)

河野昭三[#] (甲南大学)

産業心理学者 D. マグレガーは、1960 年著作において Y 理論を提唱した。教科書等による同理論の導出過程についての説明は、心理学者マズローが提唱した欲求階層説を援用したものと紹介にとどまっている。しかし彼がそのような着想に至った経緯は、マズローの考え方のみに依るのではなく、自ら行った実地調査によっても裏打ちされていた。本発表では、この点を彼の 1946 年論文から確認する事を目的とする。

PS14. 改訂嫌悪傾向・感受性尺度日本語版の因子構造, 信頼性, 妥当性

岩佐和典 (就実大学)

田中恒彦# (滋賀医科大学)

山田祐樹# (九州大学)

本研究では、嫌悪 (disgust) の代表的な測定法のひとつである改訂嫌悪傾向・感受性尺度の日本語版を開発し、その因子構造ならびにその交差妥当性、さらに信頼性と妥当性を検証した。その結果、改訂嫌悪傾向・感受性尺度日本語版は、原尺度と同様の因子構造によく適合し、複数サンプルによる交差妥当性も確認された。さらに、十分な内的整合性、再検査信頼性を示すとともに、構成概念妥当性にも支持が得られた。

PS15. 社会的価値の志向性が悲しみを伴った感動に及ぼす影響

—お金プライミング操作と映像『さよならドラえもん』を用いて—

加藤樹里 (一橋大学大学院社会学研究科)

村田光二 (一橋大学大学院社会学研究科)

他者を愛し献身するという社会的な価値を描く物語には、その価値を見出せるからこそ感動すると考えられる。このことを実証的に検討するため、本研究では一時的に社会的価値の重要度を下げる操作を行い、その操作が感動の強さに及ぼす影響を検討した。実験では乱文構成課題によりお金概念をプライミングすることで、自分一人で何でもできるという自立的状态にし、その後感動的な映像を視聴してもらい感動の程度を評定を求めた。

6月1日(日) 大会2日目 ポスター発表②

PS16. 幼児の指差し行動にみられる注視と表情認知にともなう情動調整過程

中田 栄 (帝京大学)

本研究は、2歳児の指差し行動にみられる注視と表情認知にともなう情動調整の特徴を調べ、表情認知と行動分析から情動調整を明らかにすることを目的とした。その結果、2歳児が笑顔を認知したとき、指差しながら注視し、安心して笑顔に接近する行動が示された。怒りの表情の接近に対しては、怒りを認知した時点で不安、恐怖、緊張を軽減するために逃げるという情動調整の特徴が明らかにされた。

PS17. 「笑うこと」が気分の改善に及ぼす影響

平井 花 (学習院大学大学院人文科学研究科心理学専攻)

本研究では笑うことに関する尺度を作成し、意識的な態度と無意識的な笑顔表出が気分の改善に及ぼす影響を調査した。質問紙調査 (Ns = 70, 176) の結果, “笑うことの望ましさ”と“娯楽媒体・施設への接近”の2因子から成る尺度が作成された ($\alpha s = .83 - .90$)。また実験により, 笑いが生じるような映像を見た群では“望ましさ”と表出が気分に影響を及ぼすことが示唆された ($\beta s = .46, .45, ps < .05$)。

PS18. 複数人数での資源分配における罪悪感の影響

古川善也 (広島大学大学院教育学研究科)

中島健一郎[#] (広島大学大学院教育学研究科)

蔵永 瞳 (就実短期大学幼児教育学科)

森永康子[#] (広島大学大学院教育学研究科)

De hooge et al. (2011)は, 被害者に対する罪悪感は被害者への資源分配を増やすが, その被害者に回された資源は自分の分ではなく第三者の分を減らすことで補われていることを見出している。本研究ではこのような現象が本邦においても起こるのかどうかの確認を行った。さらに罪悪感と共に同時生起する恥感情の影響についても合わせて検討を行った。

PS19. 尊敬の心理学的特徴

蔵永 瞳 (就実短期大学幼児教育学科)

樋口匡貴 (上智大学総合人間科学部)

尊敬の心理学的特徴を検討するため, 214名の大学生を対象に, 各自の尊敬体験を想起してもらって調査を行った。その結果, 尊敬を感じる対象は, 個人的関係のない他者, 上位者, 同地位者, 下地位者への尊敬の4種類に整理された。また, 尊敬の感情体験は, 敬愛と畏怖の2種類があることが示された。このうち, 敬愛は交感神経系の言語報告と, 畏怖は副交感神経系の言語報告と関連があることも示された。

PS20. 2項目自尊感情尺度の妥当性の検討—評価的側面・受容的側面それぞれに注目して—

箕浦有希久 (関西学院大学大学院文学研究科)

成田健一 (関西学院大学文学部総合心理科学科)

箕浦・成田 (2013) は大学生への質問紙調査で2項目自尊感情尺度による全般的自尊感情測定の妥当性を確認した。本研究は異なるサンプル・調査方法で尺度の妥当性を再確認するため, 成人へのWeb調査を行った。また尺度を構成する評価項目と受容項目の特徴も検討した。2項目自尊感情尺度, 自己好意/自己有能感尺度等を測定し, 相関分析と因子分析の結果から, 尺度全体および評価項目と受容項目各々の妥当性が確認された。

PS21. 図形選択課題における情動刺激挿入と作業負荷増加の影響

和田一成（西日本旅客鉄道株式会社安全研究所）

上田真由子（西日本旅客鉄道株式会社安全研究所）

本研究では、新奇に覚えた図形を指定された順番に選択していくという高次の認知課題における情動誘発や作業負荷の影響を実験により検討した。実験では、課題の連続実施中に交通事故の写真を突然提示するなどして情動を操作し、二重課題状況にするなどして作業負荷を操作した。その結果、図形の選択における省略エラーについて、情動と作業負荷の交互作用が得られた。しかし、他の種類のエラーについては、有意な効果はなかった。

PS22. 選択肢の空間的位置が注意と選好判断に及ぼす影響

大沼卓也（東北大学大学院文学研究科）

坂井信之（東北大学大学院文学研究科）

選好判断において、選択肢の空間的位置が選択に影響を及ぼすことがわかっているものの、その具体的なメカニズムは明らかになっていない。そのため本研究では、商品棚を前に選好判断をおこなう参加者の眼球運動を測定し、選択肢の空間的位置による注意への影響および注意による選好判断への影響を検討した。その結果、特定の位置にある選択肢に対する注意および選好の偏りがみられたものの、両者の間に関連はみられなかった。

PS23. リフレッシュ・キャンプが被災地児童の情動知能に及ぼす影響

庄子佳吾（独立行政法人国立青少年教育振興機構）

国立花山青少年自然の家では、宮城県沿岸部地域に在住する児童を対象に「リフレッシュ・キャンプ はなやまんまる☆きゅんぷ」として、震災によるストレスを軽減し、心身の健康、リフレッシュを図るための事業を実施している。本稿では、参加児童の心理面への影響の検証ならびに今後の復興支援を考える判断材料とすることを目的とし、情動知能に着目した調査を行なった結果、参加者の情動知能に好影響を及ぼす可能性が示唆された。

PS24. ポジティブ感情による行動拡張効果の検討

菅原大地（筑波大学人間総合科学研究科）

本研究では、ポジティブ感情により行動の拡張効果（Fredricson & Branigan, 2005）を検討した。方法としては、ポジティブ感情か統制感情のいずれかに誘導した後に、3分間の自由時間を設定し、その間の行動をビデオで撮影し、机の上の物体（例えば、本やパズル）を凝視する時間と、実際に接触する時間を測定した。その結果、統制群に比べポジティブ感情群は凝視時間が増えることが明らかとなった。

PS25. 情動知能特性と心の健康の検討—学生の専攻別による比較—

橋本由里（島根県立大学看護学科）

平井由佳[#]（島根県立大学看護学科）

本研究ではEQSとSUBIを用い、情動知能特性と心の健康について学生の専攻別による比較を行った。その結果、看護学生の対人対応得点は文系学生、理系学生の得点よりも高く、文系学生の状況対応得点は看護学生の得点よりも高いことが示された。全ての専攻において自己対応得点、対人対応得点、状況対応得点と心の健康度の得点の間に正の相関が認められた。なお、看護学生の得点は平井・橋本（2013）を参照した。

PS26. 特性不安と古典的分化条件づけ—皮膚電気条件づけ事態を用いて—

沼田恵太郎（関西学院大学大学院文学研究科）

宮田 洋[#]（関西学院大学名誉教授）

本研究では特性不安の高低により、分化条件づけの程度が異なるか否かを検討した。条件刺激はPC画面上に呈示される図形であり、無条件刺激は手首への電撃であった。従属変数は電撃予期と皮膚電気活動であった。その結果、前者では不安の高低により分化に差がみられたが、後者では差はみられなかった。これらの事実は、特性不安が条件づけられやすさというよりはむしろ、随伴性意識、あるいは認知の過程に関与することを示唆している。

PS27. 保護者の対人関係および子どもに対する働きかけの意識と保育園児の社会的行動

—子どもの笑顔に焦点を当てて—

福岡欣治（川崎医療福祉大学）

先行研究では、母親の情動表出傾向と幼児の行動との関連性が指摘されている。本研究では、保育園に子どもを預けている保護者における育児にかかわる対人関係および子どもに対する意識的な働きかけと、子どもの社会的行動との関連を検討した。保護者 264名の回答により、子育て時に頼りになる友人の存在、および子どもへの笑顔での働きかけの意識が、他の子どもといるときの子どもの笑顔の表出と関連することが示された。

PS28. 20代精神科看護師の感情と身体的拘束の見込みに関する研究

石井慎一郎（自治医科大学看護学部）

目的：精神科看護師の感情と身体的拘束の見込みの関係を明らかにする。対象：20代精神科看護師54名，精神科以外の20代看護師44名（対照群）。調査：JWLEISと身体拘束の見込みを評価する仮想事例を用いた。結果：感情指数と拘束の見込みの相関関係は，対照群は感情指数が高ければ拘束の見込みが低い〔負の相関〕を示したが，精神科以外の看護師では〔正の相関〕を示した。

PS29. 小中学生の5因子性格特性と抑うつに関連

谷 伊織（東海学園大学人文学部）

近年，わが国では子どもの精神的健康に関する研究がさまざまな領域において行われている。問題への予防的介入を実施する上で，精神的健康に関連するさまざまな要因が検討されているが，本研究では特に5因子性格特性との関連を検討した。小中学生4683名を対象とした質問紙調査を行い，共分散構造分析を行った結果，5因子性格特性と抑うつとの間に有意な関連が見出された。

PS30. 選択による選好の上昇は刺激への注意の増加を伴う

—事象関連脳電位を用いた検討—

木村健太（関西学院大学応用心理科学研究センター）

片山順一#（関西学院大学文学部）

主体的に選択したものに対して選好が上昇することが知られている。本研究は，選択による選好の上昇に認知処理の変容が伴うかを事象関連脳電位により検討した。実験では二度の風景画像の選好評定の間に同じ評定値の画像二枚から好きな方を選択させた。実験の結果，選択した画像に対して選好の上昇と後期陽性成分の振幅の増加が観察された。結果から，選択による選好の上昇はその刺激への注意の増加を伴うことが分かった。

PS31. 感情刺激とオノマトペとの関連

野中陽一郎（広島大学大学院教育学研究科）

井上 弥（広島大学大学院教育学研究科）

本研究の目的は，顔面表情を説明する際，オノマトペをどのように使用するのかを明らかにすることである。具体的には，6つの基本感情を表す顔面表情イラストを大学生に呈示し，各顔面表情から読みとることの出来る感情をできるだけ多くのオノマトペで表現するよう求めた。顔面表情について得られたオノマトペの反応総数・種類に基づきクラスター分析を行い，各クラスター群にどのような顔面表情刺激が対応するのか関連を検討した。

北大路書房

〒603-8303 京都市北区紫野十二坊町12-8

☎ 075-431-0361 FAX 075-431-9393

http://www.kitaohji.com

振替 01050-4-2083

ふと浮かぶ記憶と思考の心理学

—無意図的な心的活動の基礎と臨床— 関口貴裕・森田泰介・雨宮有里編著 A5・248頁・本体3000円＋税
無意図的想起やマインドワンダリング、洞察問題解決、思考抑制の皮肉過程、反すう、侵入想起など、自らの意志と無関係に意識に上る無意図的な心の働きにいち早く注目し、主に認知・臨床心理学から果敢に挑んだ書。

新 社会心理学

—心と社会をつなぐ知の統合— 唐沢 かおり編著 A5・228頁・本体3200円＋税 社会心理学の諸領域に共通して問題となる「心と社会を語る重要な概念」を取り上げ、それらが何を語ってきたか、その用いられ方の問題点や限界がどこにあるのかを論ずる。「横割り」的に分断されてきた研究領域をつなぐ意欲的な試み。

子どもの仲間関係

—発達から援助へ— J. B. クーパー・シュミット & K. A. ダッジ編 中澤 潤監訳 A5・320頁・本体3600円＋税 子どもの仲間関係における成立過程上の様々な問題に関し、最新の理論をベースとした包括的解説書。社会的情報処理モデルの改訂とその研究の進展、情動制御や適応との関連、家族関係が仲間関係に及ぼす影響などについて詳説。

沈黙の螺旋理論 [改訂復刻版]

—世論形成過程の社会心理学— E. ノエル・ノイマン著 池田謙一・安野智子訳 A5・368頁・本体4700円＋税 少数派は孤立を恐れて沈黙し、多数派は声高になる。沈黙は雄弁を生み、雄弁は沈黙を生むというこの螺旋状のプロセスの中で、少数派はますます少数派になっていく……。世論研究の名著、待望の復刻版。

現代の認知心理学 2 記憶と日常

日本認知心理学会監修 太田信夫・巖島行雄編 A5・354頁・本体3600円＋税 認知心理学の核をなす記憶研究の到達点を概観し、今後を展望する。ワーキングメモリ、長期記憶、意識、記憶の脳内メカニズム、記憶の生涯発達などの重要テーマを網羅するとともに、日常場面や臨床場面での記憶のメカニズムを詳細に論じる。

シリーズ21世紀の社会心理学 別巻 社会心理学研究の新展開

—社会に生きる人々の心理と行動— 高木 修監修 大坊都夫・竹村和久編 B5・224頁・本体3200円＋税 現代の社会心理学研究の動向を分野毎にまとめ、第一線の研究者が現在進めている研究テーマについて、その領域における位置づけと関連する理論的アプローチや実証的展開を、概観。「シリーズ21世紀の社会心理学」の新展開編。

社会的認知研究

—脳から文化まで— S. T. フィスク・S. E. テイラー著 宮本聡介・唐沢 稔・小林知博・原 奈津子編訳 A5・568頁・本体5800円＋税 人間はどのようにして自己や他者についての理解を形成し、意味を見出すのか。その解明をめざす領野の欧米での代表的テキスト。脳神経科学や文化心理学の最新知見も取り入れ、研究の進展可能性を示唆。

仮想的有能感の心理学

—他人を見下す若者を検証する— 速水敏彦編著 A5・244頁・本体2800円＋税 他人を見下すことで自身の有能さを保持する「仮想的有能感」。その概念定義と測定、隣接概念との比較、仮想的有能感を持つ人の個人的特徴、その背景要因、文化差、問題行動との因果性についての実証研究を紹介。

改訂エングサイクロペディア 心理学研究方法論

W. J. レイ著/岡田圭二編訳 本体5000円＋税

心理学基礎実習マニュアル

宮谷真人・坂田省吾代表編集 本体2800円＋税

心理学教育のための傑作工夫集

L. T. ベンジャミン・ジュニア編/中澤 潤監訳 本体2800円＋税

わかって楽しい心理統計入門 Ver.2

松田文子・三宅幹子・橋本優花里著 本体2500円＋税

増補改訂 SPSSのススメ 1

竹原卓真著 本体3200円＋税

改訂新版 初めての心理学英語論文

D. シュワープ・B. シュワープ・高橋雅治著 本体1900円＋税

現代の認知心理学 1 知覚と感性

日本認知心理学会監修/三浦佳世編 本体3600円＋税

現代の認知心理学 2 記憶と日常

日本認知心理学会監修/太田信夫・巖島行雄編 本体3600円＋税

現代の認知心理学 3 思考と言語

日本認知心理学会監修/梶見 孝編 本体3600円＋税



有斐閣

出版案内 東京・神田・神保町2 TEL:03-3265-6811
http://www.yuhikaku.co.jp/ (価格は税別)

◎図書目録送呈◎

認知心理学ハンドブック

日本認知心理学会編 有斐閣ブックス三五〇〇円
学会の総力を結集し、認知心理学の全体像を173項目でカバーした
手引書・事典。

パーソナリティの心理学

ベリンック 現代心理学(5)
岡田康伸・藤原勝紀・山下一夫・皆藤章・竹内健児 著
パーソナリティの基本的な理解が得られる入門書。A5判二一〇〇円

パーソナリティ心理学

人間科学、自然科学、
社会科学のクロスロード
榎本博明・安藤寿康・堀毛一也 著 有斐閣アルマ 一九〇〇円

進化と感情から解き明かす社会心理学

北村英哉・大坪庸介 著 有斐閣アルマ 一九〇〇円
社会的行動をとらえ直す

心理学から考えるヒューマンファクターズ

安全で快適な新時代へ
篠原一光・中村隆宏 編 有斐閣ブックス二六〇〇円
人間の行動特性を理解し、実践にいかす

リスクの社会心理学

人間の理解と
信頼の構築に向けて
中谷内一也 編 リスクに向き合うために A5判三〇〇〇円

感情心理学入門

大平英樹 編 有斐閣アルマ 一九〇〇円
パスカルから現在までの様々な理論を整理し、生物学的基盤／機能／
進化／認知／発達／言語／病理／健康という切り口から読み解く。

怒りの心理学

怒りとうまくつきあう
ための理論と方法
湯川進太郎 編 四六判一七〇〇円

心理学入門

心理学はこんなに面白い
サトウタツヤ・渡邊芳之 著 有斐閣アルマ 一九〇〇円

いつでも、どこでも、どんなデバイスでも。
企業に、教育に、団体に。新しいクラウド型オフィス生産ツール。

Google Apps for Business for Education



栃木県内の
Google Appsは
おまかせください!

- クラウドコンピューティング導入支援サービス及び運営サポート
- 誰でも簡単に更新できるホームページ制作サービス **Make Apps**
- 紙文書をクラウドで共有! 複合機+Google Apps連携ソリューション

お問い合わせは●●栃木県内初のGoogle Apps正規代理店



グローバルより、ローカル。
Mplus
IT solution & Web marketing

有限会社 マツヤ Mplus事業部
〒322-0025 栃木県鹿沼市緑町1-2-39 TEL▶0289-62-0101 FAX▶0289-65-3684
E-MAIL▶info@matuya-net.jp URL▶http://googleapps.matuya-net.jp



日本感情心理学会第22回年次学術大会

共催

宇都宮大学大学院国際学研究科
宇都宮大学教育学部・同大学院教育学研究科
異分野融合研究会

協賛

株式会社 北大路書房
株式会社 有斐閣
有限会社 マツヤ
マツヤ MPLUS 事業部

本大会を開催するにあたり、上記、団体、企業各位より多大のご支援をいただきました。
ここにそのご芳名を記して、心から感謝の意を表します。

2014年5月

日本感情心理学会第22回年次学術大会準備委員会 委員長 中村 真

大会準備委員会

委員長：中村 真（宇都宮大学）
副委員長：澤田 匡人（宇都宮大学）
事務局長：石川 隆行（宇都宮大学）
委員(企画担当)：米山 正文（宇都宮大学）
委員(企画担当)：清水奈名子（宇都宮大学）
委員(広報担当)：藤井 勉（Sungshin Women's University）
大会支援スタッフ：森下 順子（宇都宮大学大学院生）

〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町 350

宇都宮大学

E-mail: jsre@utsunomiya2014.jp

HP: <http://jsre.wdc-jp.com/conf/2014/>

*表紙・Web デザイン 澤田匡人